

令和2年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

「夢・発見・実現」。総合学科高校の特色を活かし、「ドリカム」授業をコアカリキュラムとし、各系列での学習を通して生徒の興味や関心に応じた幅広い知識や技能を習得させるとともに、学校全体での人権教育・生徒支援・生徒指導のうえに、キャリア教育・教科指導等を密接に連携させて、きめ細かい支援・指導を行い、生徒一人ひとりの「進路実現」を具現する。

- 1 将来に夢と希望を持ちながら自己の具体的なキャリアビジョンを設定し、実現に向け粘り強く継続する力を育成する。
- 2 多様な社会の流れや課題の本質を理解し、高い自尊感情を持ちながら変化の時代を生き抜く力を育成する。
- 3 地域との繋がり人との繋がりを大切にし、互いに助け合い高めあう関係を築くことのできる力を育成する。
- 4 「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」実施校として、外国にルーツを持つ生徒への適切な支援を行うとともに、多文化共生を推進する。

2 中期的目標

1 「夢・発見・実現」より「夢から発見」一夢を見つけて将来に向けた力をつけるキャリア教育を推進するー

(1) 「ドリカム」をコアカリキュラムと位置づけ、全ての授業との関連を持たせつつ、自分で考え自分の言葉で表現できる生徒を育成する。

ア 3年間を見据えたグループ学習等を通じて主体的に学ぶ意欲を養い、多様な出会いや体験を通じて自分の将来像を描く中で、自尊感情や社会的有用感に富んだ人間性を育成し、生徒に自己実現させる。

イ 3年生課題研究において、自分が選んだテーマを研究し、論文にまとめ、プレゼンテーションすることを通じて、視野を広げ伝える力を育みながら、自らの個性・生き方を磨き、自らの進路を切り開く力を育成し、生徒に自己実現させる。

ウ 学校外の協力も積極的に導入し、生徒の基礎学力と学習意欲の向上をめざして多様な進路を保証する。大会・コンテスト・検定等に積極的に挑戦し、生涯を通じて学ぶ力を身につけさせ、幅広い進路を確保して、生徒に自己実現させる。

2 「夢・発見・実現」より「発見から実現」ー総合学科の特色が最も現れる「授業」を大切にするー

(1) 生徒の実態等に基づき、基礎学力を定着させるとともに、興味関心・進路希望に応じた教育内容を創造し、生徒の学ぶ力を向上させる。

ア 新学習指導要領の導入に合わせ、系列等の選択科目を刷新し、総合学科としてカリキュラムの充実を図り、生徒の学習意欲を向上させる。

イ 学び直しや少人数展開授業の実施等により、文章読解の力など基礎学力の定着を支援し、生徒の学習意欲を向上させる。

(2) 主体的・対話的で深い学びを実現した授業づくりを進め、生徒の学ぶ力を向上させる。

ア ICTを活用した授業改善を行い、府教育センターの研修や他校の授業見学等に積極的に参加し、授業力を磨いて生徒の学習力を向上させる。

イ 「主体的・対話的で深い学び」の推進のため、校内研修や授業見学等を行い、教員全員が相互に実践を共有して生徒の学習力を向上させる。

(3) 「総合学科」の特徴を生かし、「総合学科」らしい進路を含めて、進路決定率90% (H29:90%、H30:88%、R1:87%)。

3 「夢・発見・実現」に打ち込める学校ー安全で安心な学びの場づくりー

(1) 生徒一人ひとりをサポートする人権教育・生徒支援・生徒指導の一層の充実を図り、生徒の不安を解消する。

ア 保護者・中学校・本校並びに各生徒の地域や外部の専門人材・支援機関等と連携し、包括的で効果的な生徒支援・生徒指導を行う。

イ 学校行事や交流活動などの生徒が生き生きと活動できる場を3年間見通した活動の中で提供する。部活動については引き続き重点項目とし、生徒の自尊感情や集団の中での有用感を高め、興味関心のあることに生涯を通じて継続的に取り組む力を育成する。

ウ 日本語指導の必要な生徒について、母語指導の充実や進路への取組みを進めるとともに、学校全体で多文化共生の取組みを進展させる。

(2) 教職員が学校経営計画のもと志を一つにし、互いに協力し合う中でチームとして機能する職場づくりを推進する。

ア 担任だけでなく副担任も含め、情報共有を密にしなが、全ての教職員が適切かつ丁寧な指導できるよう、チームワークを活かし学年団として対応し、生徒が安心して相談できることに努める。

イ 校内研修やディスカッションを通して経験の少ない教員のOJTを図り、併せてミドルリーダーの育成を図る。

ウ 年齢構成等、教員集団の現状を踏まえたうえで、教職員一人ひとりの意識改革と学校全体のチーム作りを図り「働き方改革」に取り組む。

4 「夢・発見・実現」のための連携ー「キャリアパスポート」の継承、地域や保幼小中高連携との推進ー

(1) 絆づくりと活力あるコミュニティの形成により地域とのつながりを充実させる。

ア これまで培ってきた幼保小中との連携、地域連携のネットワークを基盤に、地元に基づいた「開かれた学校」づくりを一層推進する。

イ 学校運営協議会及び学校教育自己診断等を活用し、保護者や地域のニーズを反映した学校改善に取り組むとともに、「キャリアパスポート」を引きつぎ、また「豊川教育コミュニティネット」の一員として、中学校や地域とのネットワークを強化し、総合学科高校としての情報を積極発信する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和2年12月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>「学校が楽しい」は72%から68%に下がった。行事・修学旅行で14%、地域との交流で8%の低下があるなど、コロナ禍で行事がなくなり、学外での授業や実習が行えなかった影響が大。「先生は生徒の意見を聞いてくれる」など指導への納得感について値が低いところも、コロナ禍による中止・禁止・制限が影響している。必修修が多く総合学科の特徴が出にくい1年生の数字が悪い傾向もある。</p> <p>総合学科の特徴である系列や選択授業については4%の向上で81%となるなど、授業や評価についての数字は改善した。規律を守ることなど生徒指導に関する内容や、進路・キャリアに関する数字も改善しており(4~11%)、命・人権・多文化・豊かさ等の学びについても向上がある(6%前後)。府教育センターのパッケージ研修等も含めて授業力向上のプロジェクトを進め、行事や体験授業・交流活動が行いにくい分、日々の授業を大切にしたい成果と考える。2・3年では制約された日々の授業の中でも総合学科らしさを発揮できたとも考える。ICT機器の活用での6%UP等は、授業力だけでなく、ドリカムルームの刷新やコロナ対策費の活用効果でもあり、GIGAスクール構想の実現につながる数字と判断している。</p>	<p>第一回(7/16開催)アンガーマネジメントなどを指導する授業やホームルームが必要。外国にルーツのある生徒について、理解しようとする気持ちで接して、コミュニケーションを。地域連携がコロナ禍で難しくなっているが、魅力ある成長した福井高校生を小・中学校生に見せて。</p> <p>第二回(11/11開催:授業見学)すごく先生方の授業が変わってきたと実感。生徒が非常に落ち着いて先生との関係性ができている。ほとんどの生徒が学ぼうとしている。入学者数が苦戦しているようだが、頭髪、服装、授業態度を含めその点を感じない。(コロナ禍を受けて)生活困窮の対応ができるので連携を。高校生については「若い、朝起きることができ」だけで資格ありと言える。挫ける前に支援したい。</p> <p>第三回(2/24開催)学習指導員は有用。先生の授業の工夫との相乗効果を期待する。大学進学も一定出しているのだから、そのアピールが必要ではないか。総合学科だからこその進学を意識した授業を組むこともできるはず。ドリカムフェスタは、大ホールでなく校内で実施したことで聞き手との距離が近くたくさんの生徒が発表できたこと、1・2年生にはいい刺激になったのでは。教育行政が1ミリ動いたら、現場は何センチも動く。現場の先生方はそれにとらわれず、目の前の生徒をしっかり見てほしい。頑張っている生徒と卒業生の様子を見ることができ、元気になった。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
「夢・発見」 キャリア教育の推進	(1)「ドリカム」を全ての学びの中心に ア、グループ学習の実施 イ、課題研究の充実 ウ、各種挑戦の奨励	(1) ア、プロジェクト学習や多様な社会人と出会いを通じて、生徒に進路や生き方について考えさせ、自己有用感を向上させる。 イ、刷新したドリカムルームをフル活用するとともに、他の ICT 環境も充実させ、ドリカムフェスタ(総合学科発表会)を充実させ、自己肯定感も向上させる。 ウ、大会・コンテスト・資格等への挑戦を奨励し、目標を設定して努力する姿勢を育成する。	(1) ア、自己診断アンケートの進路・生き方についての肯定的回答：80% (R 元年度 77%)。 イ、総合学科卒業生アンケートの「ドリカム」関係の肯定的回答：75%(同 70%)。 ウ、一定の大会・コンテスト・資格等に挑戦したものへの「福井高校賞」授与者数について 20 名をめざす (同 13 名)。	(1) ア：81% (◎)、イ：79%(◎)、ウ：61人(○)。 ・コロナ禍のため学校教育自己診断(以下：診断)でも総合学科卒業生アンケート(以下：卒アン)でも、全般的な学校生活の満足度が低下する中で、進路・生き方は1%、ドリカムでは9%満足度がUPした。生徒にとっては感染防止のためとはいえ制限・制約の多い中で、コロナ禍を超えた生き方等を共に考え学んだ成果と自負する。 ・ドリカムでは、大学ホールを借りてのフェスタを行えなかったが、3年が1・2年の教室を回ってプレゼンしていくスタイルで発表大会を行い1・2年生に好評。3年生も自己肯定感を上げた。 ・定員割れした1年に、同じく過去に割れた学年の先輩(消防士・看護師・プロカメラマンなど)から今の姿を見せてもらいつつキャリアについて学ぶ取組みなどを行い、生徒のモチベーションUPにも努めたことも良い取組みであった。 ・数値化は難しいが、昨年比で生徒の笑顔はむしろ多いと感じられることもある。1年間皆勤する生徒も増加の見込み。コロナ禍中でもモチベーションは一定作れた。
「発見・実現」 確かな学力の定着	(1) 興味関心・進路希望に応じた教育内容の創造 ア、選択科目の精選と内容の充実 イ、少人数展開授業・文章読解・学び直しの内容の向上 (2) 主体的対話的な授業による学習意欲の向上 ア、授業改善の取組み イ、学習力向上のための研修の実施	(1) ア、総合学科の特徴を生かして生徒の興味関心やキャリア形成に有用な科目設定・授業展開を行い、生徒に自己実現させる。 イ、英数では習熟度別授業を実施するとともに、全教科で読解力の育成と学び直しの要素を取り入れた授業を行う。 (2) ア、経験の少ない教員を中心に、OJT や校内研修会を充実させ、生徒の学習力を向上させる。 イ、教員相互の授業見学や研究授業を実施するとともに、各教員の目標に「主体的・対話的」な授業の工夫を設定し、実践を検証する。	(1) ア・イ、卒業生アンケートの「総合学科で学んでよかった」の回答：90% (R 元年度 93%)。 ア・イ、自己診断アンケートの「他の学校にはない特徴」の回答：75% (同 77%)。 (2) ア、自己診断アンケートの「授業が分かりやすい」の回答：60% (同 54%)。 イ、自己診断アンケートの「教え方の工夫」の回答：70% (同 65%)。	(1) 卒アン：88%(△)。診断の特徴：74%(○) ・低下は行事に対する満足度の落ち込みが主因。総合学科として重要な要素の実習・外部連携も大きく制約され、ペアワークやグループワーク、さらにディスカッションさえ制限される中で、ICT やコロナ対応の学習指導員をフルに活用することで一定のレベルを維持できたが、家庭・福祉など、実習等による達成感で例年平均を押上げる教科は大変苦勞もした。今年度の環境下では満足すべき数値と判断する。 (2) 授業分かりやすい：58%(△)、工夫66%(△)。 ・授業アンケートを見ると、経験値が高い年配教員より若い教員が生徒に好感度であった。コロナ禍で従前の授業、特に体験的授業ができない中、それでも ICT 機材等を活用して新しい試みをしたことは成果につながっている。 ・「授業力向上」のプロジェクトチームが、府教育センターのパッケージ研修ともリンクした取組みを校内で計画的・継続的に行い、相互の授業見学や研究授業などを進めて成果を得た。 ・オンライン学習については、生徒自宅の学ぶ環境や web 環境に課題があることが浮かび上がった。単に PC 機材・通信機材等を用意するだけでは、生徒側の受入れが進まない。カメラには生活背景も写り込む。

府立福井高等学校

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">安全で安心な学びの場づくりの推進</p>	<p>(1)人権教育と生徒指導等の充実</p> <p>ア、生徒に寄り添った指導の促進</p> <p>イ、学校行事や部活動の充実</p> <p>ウ、多文化共生の取組み</p>	<p>(1)</p> <p>ア、職員研修や専門機関等の指導を受けるケース会議を行う。丁寧な情報共有ときめ細かい指導により、生徒が「学校生活を楽しい」と感じる雰囲気を醸成する。</p> <p>イ、特別活動をはじめ、集団作りの観点から3年間を見通した取組を進める。部活動においては学校全体で支援体制を充実させ、加入率をあげ、かつ継続させる。</p> <p>ウ、日本語指導・母語指導・進路指導の充実と多文化共生の取組みを学校全体で進める。</p>	<p>(1)</p> <p>ア、研修・ケース会議を年間5回以上実施。自己診断アンケートの「学校に行くのが楽しい」の回答:75%(R元年度72%)。</p> <p>イ、部活動の加入率の減少を止め、体育祭・文化祭・修学旅行について自己診断アンケート肯定的回答:70%(同67%)。</p> <p>ウ、多文化共生にかかる自己診断アンケートの肯定的回答:70%(同63%)。</p>	<p>(1)</p> <p>楽しい:68%(○)、行事:53%(△)。</p> <p>・コロナ禍の影響で体育祭・文化祭・部活動大会・修学旅行:中止等で、日々も制約・縮小での数字。それでも楽しいと評価する回答が68%もあることは、学校はあるだけでも大切と心するとともに一定成果も上げたと判断する。</p> <p>・多文化は68%(○)。数字未達で○とするのは、文化観の相違による生徒間のずれ違いが減少(特に後半)するなど、相互理解が進んだと思われることによる。外国ルーツの生徒の努力はTV番組にもなった(NHKバリバラ)。</p> <p>・部活動も困難な中、ダンス部が全国大会に出場し、陸上部もフィールド競技で活躍、投擲で全国の強化選手に選ばれるものも育っている。合同チームで頑張る野球部の活躍もメディアにも取上げられた。</p> <p>・「生徒連携委員会」を時間割内の定例会議として生徒情報の共有や支援に努めた。SC・SSWとの連携を深める中で、研修・ケース会議も10回以上行った。</p> <p>・外部連携についても、従前の児童生徒対応の関係先に加えて、茨木市のこども育成部関係などユース事業展開者とも連携を深めている。1月からはコロナ禍の心のケアを兼ね、茨木市のユースプラザが校内居場所事業を始めてくださっている。中学では不登校(気味)であった生徒を受入れ、協力・支援して学習させ、卒業後は再び地域の資源につなぐという連携環ができつつある。</p>
	<p>(2)志を一つにする教職員集団</p> <p>ア、全ての教職員のチームワーク向上</p> <p>イ、ミドルリーダーの育成</p> <p>ウ、「働き方改革」への取組み</p>	<p>(2)</p> <p>ア、広報連携部を組織し、首席・分掌長・学年主任を中心に組織で生徒対応する。</p> <p>イ、Yプロジェクトを継続し、各業務をチームで行うことを推進し、さらにその姿を生徒に見せて協力の大切さを実感させる。</p> <p>ウ、一斉休日や部活動の休養日の趣旨を徹底し、業務の平準化をすすめて生徒にも「働き方改革」の実際を見せ、将来の働き方を考えさせる。</p>	<p>(2)</p> <p>ア、自己診断アンケートの「悩みや相談に真摯」の肯定的回答:70%(同64%)。</p> <p>イ、自己診断アンケートの「先生はお互いに協力」の肯定的回答70%(同66%)。</p> <p>ウ、教職員の超過勤務時間を、月35時間以下とし、ストレスチェック値を10ポイント下げる。</p>	<p>(2)</p> <p>悩み・相談:64%(△)、先生協力:66%(△)、超過勤務時間:月35時間以上は7月のみ(○)、ストレス:8ポイント↓(○)。</p> <p>・コロナ禍を考慮すれば、生徒から見た数字が前年並みで、教員のストレスが下がっていることは、十分ではないが生徒支援に一定の成果(例:前年(含む中学時)比での欠席・遅刻の減少、長欠からの復帰、退学者の減少など)が出ている結果とも見る(退学者数R1:23人、3.8%→R2:12人、2.2%)。</p> <p>・コロナ禍の長期化で、6月の学校再開当初よりは下がるが、学校全体での欠席・遅刻の減少など生徒ががんばれていることは他にもある。</p> <p>・複数回の校内疫学調査では教職員の献身的な働きで、臨時休校期間を短縮し、授業や部活動等への影響を最小限に留めることができた。また少なくとも校内では風評被害は発生していない。対コロナ禍に係る対応については、生徒・教員共に1つに成っている。</p>

府立福井高等学校

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">多文化共生を生かした地域連携 保幼小中高大連携の推進</p>	<p>(1) 絆づくりと活力あるコミュニティの形成</p> <p>ア、地域に根ざした学校づくりの推進</p> <p>イ、「キャリアパスポート」を活かした中高連携の構築</p> <p>ウ、地域、中学校に向けた情報発信</p> <p>エ、多文化共生を生かした連携</p>	<p>(1)</p> <p>ア、生徒会、部活動などが地域のイベントに積極的に参加し、交流を深めることや、地元小中学校での出前授業を行う。</p> <p>また、茨木市人権研究会、豊川教育ネット主催の公開授業や研修に参加し、「福井高校を育てる会」と連携を強める。</p> <p>イ、一斉に始まる「キャリアパスポート」の取組みについて、小中学校との連携を深め、発展的に継承する。</p> <p>ウ、学校の取組みを HP・説明会など地域・中学校に発信するとともに、「福井高カップ」をはじめ生徒主体の取組を進める。</p> <p>エ、日本語指導が必要な生徒のための選抜実施校であることを生かし、大学等ともつながった多文化共生の連携を行う。</p>	<p>(1)</p> <p>ア、自己診断アンケートの「地域交流」の肯定的回答を 70% (R 元年度 60%)。</p> <p>イ、保幼小中一貫で取組まれる茨木市の学校等との研修会などに参加する (参加率 75%以上)。</p> <p>ウ、自己診断アンケートの「学校の HP を見る」の回答を 10%UP の 45% (同 33%)。</p> <p>エ、多文化共生の地元連携を 5 件以上行い、大学等の調査・研究にも複数協力する。</p>	<p>(1)</p> <p>地域交流：51%(△)、参加：(－：コロナ禍により研修会等中止)、HP：生徒 33→29%、保護者 38→56%：(○)、多文化：(○)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域主催の交流行事はほぼすべて中止され生徒が参加する場面がなかった。学校間や施設等との交流も主に 9・10 月の 2 ヶ月間でしか行えなかったもので 51%はそれでも高い数字。 ・福祉実習など、本来は何度も施設に出向き、顔なじみになって帰ってくるような活動はできなかった。それでも、本校のコスモス生(日本語指導)との交流を求める地元小中のニーズは高く、短い期間に複数校と交流等した。 ・地域行事に生徒が参加できない分は、地元の自主防災会の会議に教員が参加するなどして僅かでも補い、地元とのつながりを保とうと努力している。 ・中学校の取組みを引き継ぐキャリアパスポートについては、コロナ禍でキャリア教育の取組み時間確保が難しい中で、活用はまだこれからだが、社会全体の働き方が変化することでもあり、有効活用していきたい。 ・HP については、コロナ禍での情報の伝達等で保護者の利用度は大幅に向上したが、生徒についてはその情報は教室であるいは一斉メールで既知のことなので閲覧されていない。行事や部活動など、生徒が見たい内容が UP できなかった。 ・地元連携については、全般には展開しづらい 1 年となり、本校生が参加する内容では、小学校との交流授業、老人施設への手作りマスクの寄付などで 5 件は超えたが、地域の祭りへの参加などはできなかった。一方、本校に来ていただく内容では、近隣のユースプラザや大学との新たなつながりができたことを前向きにとらえて発展させたい。 ・学習指導員については、20 名の大学生(追手門)・大学院生(阪大)・社会人(茨木市ユースプラザ)等の参加があり、生徒が支援を受けることを通じて教員以外の大人と関わる機会の創造ともなった。この取組みはコロナ対応の学習指導員の制度がなくなっても続けていきたい。
---	---	--	---	--